

企業発展の鍵「ビッグデータ」

ぶぎん地域経済研究所 研究員 手嶋 裕一

大量のデータ活用

最近、ビッグデータが注目を集めている背景には、情報通信技術の発達によって、ビジネスを始め、行政、科学技術、医療、街づくりなど幅広い領域において低コストで大量のデータを活用することが可能になったことがある。

新たなデータ管理手法によりインターネット、フェイスブック等のソーシャルメディアなどにおける文字、音楽、写真、映像のほか、家電や情報端末機器等から得られる消費電力や位置情報等の各種センサー情報などが分析、処理される。そこから企業、社会、個人の活動に役立つ知見を得たり、新たなビジネスを生み出す可能性が高まってきた。

各分野での活用事例

ビッグデータの活用事例をみると、ビジネス領域では、インターネット通販会社が個々の顧客に推奨商品を提示し、量販店等でマーケティング活動に活かすなどしている。今後、ソーシャルメディア上の消費者の声を分析して、消費行動を予測したり、商品・サービスの改善や開発につなげるなど、企業の経営戦略やマーケティング活動に活用する機会が大幅に増えることとなろう。

行政・公共的領域では、スマートフォンの位置情報から交通量の制御や地震対策等の街づくりや防災計画に役立てることができるほか、社会的インフラ分野として老朽化・災害

に伴う橋梁、トンネル、道路等で早期の異常把握支援システムが構築可能となる。

また、医療分野では、病気の原因解明や予防・治療の改善に寄与することが期待されるほか、個人生活の領域では、行動特性の把握が進み、仕事、消費、余暇、健康管理、在宅医療等に関する情報・サービス提供機能が強化され、日常生活の満足度の向上が図られるとみられる。

人材不足が課題

以上のように有用なビッグデータであるが、最大の課題は、ビッグデータの活用に必要な統計学、数学、情報通信技術等の専門的知識を有し、その分析から有用な知見を引き出したり、またそれを現場に活かせるマネジメント力を有する人材が非常に不足していることである。企業がビッグデータを役立てるためには、人材の育成とともに、それを活用でき、成果を現場に活かせる体制を整備することも必要である。

中小企業にも、取り組み方次第では大企業との情報格差を埋め、大企業に引けを取らずに経営に役立てる道が開かれたと言えるのではないか。今後、ビッグデータの活用の巧拙が企業の発展を左右するとみられる。企業がそこからお宝を探し当て、経済や産業構造の改革につなげていくことを期待したい。

(本稿は埼玉新聞8月2日に掲載したものです)